

2022年11月6日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ 12章 28～34節

説教題：最も大切な戒め

先日、こんな話を聞きました。ある姉妹は、ご自分が生まれた時、お母さんの産後の肥立ちが悪いというのでしょうか、お母さんはそのまま入院しなければならなくなられ、やがて亡くなってしまわれたそうです。だからその姉妹は、お母さんの顔を見ていないのです。やがてその方は成長して、自分の田舎の村を出て町に行き、キリスト教に出会って、信仰を持って、洗礼を受けて、クリスチャンになりました。彼女は、家族に信仰を伝えたいと思いましたが、「あんな田舎に住んでいる家族がキリスト教を信じるだろうか」と思うと絶望的な気分だったそうです。しかし、そんな時、1つの事実を知るのです。あの自分を産んで亡くなったお母さんが、病院で宣教師に導かれて、信仰を持って、病床洗礼を受けていたことが分かったのです。言葉に出来ないほどの大きな喜びだったそうです。その後、田舎に住んでいる家族が、1人、1人と救われて行ったということでした。「神様は本当に恵み深い方だ」と言われていました。私達が神を愛するのは、神が私達に恵み深くいて下さるからです。

さて、今日の箇所には律法学者が登場します。「聖書」に書かれてある律法(戒め)は、全部で 613 です。その律法を研究し、生活の様々な場面に適用する細則を決めていたのが「律法学者」と呼ばれる人々です。第二次大戦前でしたか、ヨーロッパのユダヤ人社会に初めてトマトが紹介された時、「ユダヤ人はトマトを食べて良いのかどうか」、ユダヤ教のラビ(教師)達は、律法に照らして研究したそうです。結果として「トマトは食べて良い」ということになったそうですが、そのように 613 の律法の下に何千と言う細則がぶら下がっていました。細則はどんどん決められますから、律法は無限に拡大する傾向を持っていました。しかし律法学者の中にも「律法の一番のポイントは何か。律法を一言で説明するとどうなるのか」、それを探求する動きがあったのです。イエス様の 20～30 年前に活躍したヒレルという律法学者は、「あなた自身が、されることを憎む(嫌がる)ことをあなたの隣人にするな。これが律法の全体である。残りは注釈である」と説明しました。ここに登場する律法学者も、同じようなことを求めていたのだと思います。「内容」と「適用」と、お話しします。

1. 内容～最も大切な戒めとしての愛すること

受難週の火曜日、神殿でイエス様とパリサイ人やサドカイ人との議論が行われていました。イエス様は、それらの議論で見事な対応をされました。それを見ていたこの律法学者は、「この人なら律法のポイントを見事に答えてくれるかも知れない」、そう思ったのでしょう。彼はイエス様に問うのです。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか」(28)。それは「他のどんな戒めよりも大切な戒めである」とイエスが言われるのですから、「私達にとっても大切な戒めである」と言うことになります。イエスは何と言われたのか。「イエスは答えられた。『一番たいせつなのはこれです。「イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」。次にはこれです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」。この二つより大事な命令は、ほかにありません』」(29～31)。イエス様は「それは愛することです」と言われます。その愛を、2つに分けて言われました。1つは「神である主を愛せよ」、もう1つは「隣人をあなた自身のように愛せよ」です。この2つの戒めは、「旧約聖書」の中に—(「神を愛せよ」は「申命記」に、「隣人を愛せよ」は「レビ記」に)—あります。その2つの戒めを、イエスは1つに結び付けて「愛しなさい、それが大事だ、それが信仰だ」と教えられたのです。

さてしかし、律法学者は「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか」(28)と聞いて来たのだから、イエス様は1つ答えれば良かったのです。それにも拘らず、なぜ2つの答え

を為さったのか。またこれは、「一番たいせつなのは…」と言われた「神を愛すること」が一番上にあって、「次は…」と言われた「隣人を愛すること」がその下にある、というようなことなのでしょう。いや、「どれが一番たいせつか」という問いに、イエスがこう答えておられるということは、この2つは、「1つの戒め」、セットで考えるべきものなのではないでしょうか。

話が複雑になりましたが…。イエス様が引用された「レビ記」の記事を見てみます。「レビ記 19章」には、隣人を愛することが細かく書いてあります。例えば10節には、「またあなたのぶどう畑の実を取り尽くしてはならない。あなたのぶどう畑の落ちた実を集めてはならない。貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない」(レビ 19:10)と命じられています。それは「畑を持つこの出来ない人がその畑に入って残りを集めることを赦す、いやむしろ勧める」、そういう「神の教える生き方」があるのです。つまり、自分のブドウの実りを他の人に「どうぞ」と分け与える生き方が、「隣人を愛すること」として教えられているのです。しかし問題は、なぜそうしなければならないのか、その根拠となる言葉は、「わたしはあなたがたの神、主である」(レビ 19:10)という言葉なのです。14節には「あなたは耳の聞こえない者を侮ってはならない。目の見えない者の前につまずく物を置いてはならない」(レビ 19:14)とありますが、なぜ「耳の聞こえない者を悪く言うてはならないのか。目の見えない人の前につまずく物を置いてはならないのか」。そこでも、その根拠として「あなたの神を恐れなさい。わたしは主である」(レビ 19:14)とされているのです。つまり「畑の実りを分け与えること、耳の聞こえない人、目の見えない人を大事にすること」は、そのまま「神を大事にすること」なのです。ここにおいて「神を愛すること」と「隣人を愛すること」とが1つのことになるのです。「神を愛する者」は「隣人を愛する」、「隣人を愛すること」は「神を愛すること」なのです。

このことを教えるのが、イエス様が為さった「良きサマリヤ人」の譬です。あるユダヤ人がエルサレムからエリコに下って行く途中で強盗に襲われました。そして、半死半生の目に遭わされて、道の上に倒れていました。そこに2人の宗教家がやって来ます。初めは祭司です。ところが祭司は、旅人を見かけると、道の向こう側を通り過ぎて行ったのです。レビ人—(神殿で祭司の下で仕事をする人)—も、同じように通り過ぎて行きました。3番目に来たのはサマリヤ人でした。ユダヤ人にとっては400年来の敵対関係にあった民族です。ところがサマリヤ人は、倒れている旅人を憐れに思い、旅人を助けたのです。イエス様は「3人の内の誰がこの旅人の隣人になったと思うか」と問われ、「あなたも行って同じようにしなさい」と言われました。問題は、見て見ぬふりをした祭司とレビ人です。ある神学者は「祭司やレビ人は、この時聖書を読みながら歩いていただろう」とか、「神殿の行事に遅れまいとして急いでいたのではないか」と言うのです。しかし、「神殿の行事に急ぐために見て見ぬふりをする」、そういう信仰は、イエス様に言わせれば「あり得ない信仰」なのです。この「良きサマリヤ人の譬」は、ある「律法の専門家」が「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことが出来るでしょうか」(ルカ 10:25)と聞いて来た、それに答える文脈の中で語られた譬です。信仰の大事なポイントとして語られた譬なのです。イエス様にとって「誰かの隣人になって助けて上げることが、神を真に礼拝すること、永遠の命を受け継ぐこと」だったからです。だからある神学者は言います。「イエスにとって宗教は、神を愛し、人々を愛すること、人が神を愛していることの唯一の証明は、人が他人を愛することによる」(W バークレー)。

もちろん、神を愛する一番具体的な方法は、唯一の神様を「神」として礼拝することです。しかしそれと同時に、イエスはこうも言われます。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」(ヨハネ 14:15)、その後「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです」(ヨハネ 15:12)

と言われるのです。また「聖書」は言います。「どんな戒めがあっても、それらは、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』ということばの中に要約されている」(ローマ 13:9)。「神を愛すること」が「神の戒めを守ること」であり、「神の戒め」が「隣人を愛すること」であれば、「隣人を愛すること」が「神を愛すること」になります。

そして実際、例えばパリサイ人の信仰がおかしくなっていたのは、彼らは「神を愛する」と言いながら「人を愛する」ことを知らなかったからです。だから「神を愛する」と言いながら、その信仰は人を裁くことに結びついて行っていたのです。イエスは「信仰にとって最も大切なのは、神を愛することであり、隣人を愛することだ」と、「その2つは分けることは出来ない、隣人を愛することを通して神を愛して行く、そのような信仰を生きなさい」と言われたのです。ある先生はこう言っておられます。「福音というものは…クリスチャンと呼ばれる人々が身近なところでそれぞれに良き隣人たらんことを、その本来性とするといえるのではないだろうか」(工藤信夫)。もちろん、それが全てではないでしょう。しかしイエスは「善きサマリヤ人の譬」の最後に「あなたも行って同じようにしなさい」と言われました。私達も、「神を愛する故に」という観点で「隣人を愛すること」をもっと考える必要があるかも知れません。

2. 適用～愛されている者として隣人を愛する

しかしこの個所は「隣人を愛する」ことを教えるが故に、私達に「深刻な問題」を投げかけます。「あなたの隣人—(あなたに近い人)—をあなた自身のように愛せよ」と言われても、私なども「自分の愛の無さ」にいつもがっかりする者です。その私が—(「私達が」と言って良いのでしょうか)—隣人を自分のように愛せるのでしょうか。皆さんは、どうしても好きになるのが難しい人はいないのでしょうか。そのような人のことを考えると、愛することは難しいなと思うのです。人間は神に似せて造られています。だから本来、「愛の神」を映して、私達も「愛に生きる」はずなのです。でも難しい、出来ない。そこに私達の罪があるのです。ある牧師は言いました。「人を愛するのは簡単なことではありません。それは私達の自己中心的な性質と真っ向から衝突する」(R ウォレン)。こう考えると絶望的な気分になります。しかし、そこに留まってもいられません。

確かに私達は、本来生きるべき生き方を、罪によって歪められた存在です。しかし、だからこそ神の子が、十字架上でご自分の命を犠牲にして、悪の手から—(罪の支配から)—買い取って下さったのです。私達 1 人びとりは、そんな大事な存在です。神が、私達を諦めておられないのです。その意味で私達は、神に似せて造られた、その本来の姿を回復されたいと思うのです。三浦綾子さんは「人生の最後に残るのは、集めたものではなくて出したものだ」と言いました。人が世を去って行く時、「後に残るのは、その人を通して為された『愛の業』だ」ということでしょうか。それが自分を大切に、尊く生きることだと言って良いでしょう。その意味でも隣人を愛することは、大切なことだと思います。

私達は、何も世界中の人を愛さなければならないわけではない。「善きサマリヤ人」は、傷ついた旅人を求めて歩いていただけではありません。神の摂理の中で、歩みの道すがら出会った人を愛したのです。私達が隣人として愛する人々、それは、私達の生きる現実の中で関わる人達です。

しかし「隣人を愛することを通して神を愛して行く、神を愛するがゆえに隣人を愛して行く」、そのためには励ましがが必要です。それは何か。聖書が「神を愛しなさい」と言う時、その後にはこうあります。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい…あなたの神、主が、あなたの先祖…に誓われた地にあなたを導き入れ、あなたが建てなかつた、大きくて、すばらしい町々、あなたが満たさなかつた、すべての良い物が満ちた家々、

あなたが掘らなかった掘り井戸、あなたが植えなかったぶどう畑とオリーブ畑、これらをあなたに与え、あなたが食べて、満ち足りるとき、あなたは気をつけて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出された主を忘れないようにしなさい。あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない」(申命記 6:5,10~13)。「神を愛せよ」という戒めは、神が為して下さった恵みとセットになっている、というか神の恵みが前提になっているのです。初めにご紹介した姉妹の話もそうでしょう。「神が恵みを与えて下さる方だから、あなたも神を愛し、隣人を愛しなさい」と語られるのです。私は、カナダで笑わない赤ちゃんに会いました。複雑な家庭で微笑みかけてもらったことがない。そのためでしょうか、全く笑わない。無表情です。私達は、笑いかけられないと笑わない。愛されないと愛せない。愛されるから愛することが出来るのではないのでしょうか。自分の中には愛はない。でも私達には、神に愛されている愛があるのです。

神の愛は、何よりもイエス様の十字架に現れました。家の子供が生まれる前、教会の友人に赤ちゃんが生まれました。私は聞きました。「子供が生まれると神の愛が分かりますけど、神の愛が分かるようになりましたか」。彼は言いました。「神様がどんな目で自分達を見てくれるのか、それは分かって来たように思う。でも神様が僕達のためにイエス様を犠牲にしたように、人のために自分の子供を犠牲にする愛は、僕には分からない」。人間に理解出来ない愛で、神様は、イエス様は、私達を愛されたのです。私達が滅んでしまわないように、天国に行けるように愛して下さったのです。そうして、ヨロヨロとようやく天国にたどり着くような私達を、天使が大歓声で迎えてくれるのです。そして、千葉でお世話になった先生が言われました。「こんな罪深い者が、天国に行った時、神様から『ここに座りなさい』と言われるのですよ。どんなに大きな喜びでしょうか」。

しかしそれだけではなく、私達は世にあっても色々な恵みを経験して生きて行くのです。私も「これは本当に現実だろうか」と思うような状況に置かれることがあります。しかしその度に、神の恵みでそこを通り抜けさせてもらうのです。「デイリー・ブレッド」には、こんな言葉がありました。「神は…私という存在の門番として、毎日、すべてを計り、私の許容範囲を超えるものが入り込まないように、未然に削除しておられます。私の知らないうちにです…何も感謝することがないと思ったら、あなたの問題が耐えられるものであること、そして致命傷になるものから神があなたを守って下さっていることを感謝して下さい」。ここにも神の愛があります。神は私達を愛して下さっているのです。私達は、神の愛を受けているのです。だから、ある兄弟が良く言われました。「私は神に愛された。その愛された愛で人を愛し返す。それが私の信仰です」。神の愛があるから、私達も神を愛し、人を愛して行けるのではないのでしょうか。神を愛し、人を愛する、信仰の最も大切な生き方に、私達も踏み出したいと願うことです。聖霊が助けて下さいます。